



教授法 開発室

vol.19

編集／教授法開発室
発行／佛教大学
発行日／2011年6月1日
〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL.075-491-2141 FAX.075-493-9019

だより

URL <http://www.bukkyo-u.ac.jp/>

基礎学力調査（国語）・英語基礎力調査の現状と課題

教授法開発室長・社会福祉学部教授 藤松 素子

＜基礎学力調査（国語）・英語基礎力調査について＞

佛教大学では2000年度より新入生を対象とした新入生基礎学力調査を実施している。実施に先立ち確認された新入生基礎学力調査実施の基本方針では、①「学生自身に自らの基礎学力、一般教養学力について自覚させ、自律的学習への課題を明確にさせる」、②「学生の学力実態データを教員に提供し、カリキュラム構想や学習指導への資料として活用してもらう」、③「今後定点悉皆調査としてデータを蓄積していく」、④「将来的には、大学独自の基礎学力テストや学科毎のテスト開発に向けてのデータや資料、およびノウハウを得る」ことが謳われた。しかしながら、現時点において当初の目的を達成できているとはいえない。

その要因は、学生には個人別データが送付され、全国レベルにおける学力の相対的位置を確認することは可能となっているが、個々の自覚を促すための働きかけが充分なされていないこと、教員へのデータ提供方法についてコンセンサスが得られていないこと、諸般の事情により大学独自のテスト開発に取り組めておらず、利用している業者問題にさまざまな課題が明らかとなり継続的に活用できていないこと等にある。

対象者は2001年度は1回生のみを、2002年度～2008年度は1回生および3回生を対象に、いずれも春学期オリエンテーション期間にて実施してきた。2000年（予備調査）・

2001年度はX社の就職対策試験問題を採用し、2002年度～2008年度まではY社の同じく就職対策試験問題を使用してきた。しかし、教授法開発室において過去7年間のデータ分析を行った際に、入手データに不備がみつかった。また、Y社試験を受験する大学が当初より減少してきたため全国比較に信頼性がおけなくなったこと、制限時間と設問数のバランスの悪さ、入手データに対する問い合わせへの対応の不誠実さ、カリキュラム構想や学習指導への資料として活用することが困難であったこと等を理由に次年度より業者変更をすることとなった。そのため、2009年度はZ社の「基礎学力調査（国語）」（40分）と「学習実態調査（新入生アンケート）」（15分）を併用し対象も1回生のみにして実施した。

他方、英語基礎力調査については、カリキュラム改革を機に2004年度より導入され、入学時および1回生終了時の2回、TOEIC Bridge IPテストを使用して実施している。調査目的は1回生の英語力の全学的把握およびその結果を英語教育の改善に役立てることにある。全学共通科目「英語」においては、この調査結果を用いて習熟度別クラス編成を実施している。本調査の実施にあわせてアンケートを実施してきた。主に各自の英語能力や英語についての認識を問う内容であったが、2009年度からはその内容を見直し、授業の運営方法・授業内容に関する学生の意識を問う内容に変更した。この結果についても英語教育の改善に役立てていくことが課題となる。また、英語基礎力調査の個人別データについては、

各学生に返却され、学生は各自の英語力を確認すると共に1年間の学修成果を認識することができる。

< 2010年度調査結果について >

2010年度における調査結果の詳細については各報告に譲ることとして、ここでは各調査結果をふまえて、基礎学力調査実施に関わる現状と課題について述べたい。

○基礎学力調査（国語）

基礎学力調査（国語）の結果によれば、全学平均のスコアとしては昨年度と比べて大差はなく、基本的な語彙、読解手法においては概ね習得できていると考えられる。

平均スコアで比較した場合、学科別にみるとやや格差がみられるが、それ以上に注目すべきは、学科の平均スコアとしては全学並みといえるが、平均以下の層を多く抱える学生定員の多い学科の存在である。

同様の傾向として、入試種別でグルーピングして比較した場合、特別推薦入試系の平均スコアの低さに目がいきがちであるが、平均以下の層を量的に多く抱えているのは入学定員の多い一般入試の方であることがわかる。

当然のことであるが、同一学科、同一入試で入学した学生間でも多様性があり、平均化して比較をした上で手当てするだけでなく、個別学生の状況に応じた教育プログラム・教育方法の工夫を行っていかねばならないということを改めて確認しておきたい。その意味でも、前述した新入生基礎学力調査結果を教員に提供して学習指導に役立てていただくシステムを早期に構築していくことが重要であろう。

また、所属学部の違いを超えて、文章を読む為の基本的な能力を身につけさせるための工夫は更に行っていく必要がある。今回の分析結果を「現代日本語A」および、昨年度から導入された第1セメスターにおける初年次教育（各学部「入門ゼミ1」）のカリキュラム、授業運営、個別指導等にかかしていただけるようなくみづくりが求められよう。

○学習実態調査（新入生アンケート）

学習実態調査（新入生アンケート）の結果によれば、学生が授業に期待しているものの上位にあげられているのは、「説明の分かりやすさ」および「専門知識の豊富さ」である。この二項目があげられることは充分予想されることとはいえ、豊かな専門知識について分かりやすく説明することは、決してたやすいことではない。学力低下が問題視される中、学生から分かりやすいと評価される授業が、当該の領域における最高水準の知識提供の場になっているかどうかは別問題だからである。その意味では、大学教員として必ずしも重視されていない「わかりやすい板書の書き方」についての技術の習得、「質問に対する丁寧な対応」や「学生とのコミュニケーション」を心がけることの重要性等をあらためて認識すべきであろう。よりよい教育実践の為には、適切な対象把握が不可欠

である。毎回の調査結果を各学部・学科で充分ご検討いただけるようにしていくことが求められる。

○英語基礎力調査

英語基礎力調査の結果をみると、入学時におけるスコアの経年比較からは緩やかに下がっているが、1回生終了時のスコアの推移をみると2006年度以降上昇傾向にあることがわかる。その意味では習熟度別のクラス編成・運営の成果があがっていることが指摘できよう。学部学科による種々の違いは否めないが、全体的にみれば現行の全学共通科目「英語」における教育実践においては、一定の教育効果がみられるとあってよいであろう。

同時に行ったアンケート結果からは、学習者のやる気を起こさせるためには、「15人程度の少人数クラス編成」の必要性、「TOICや英検等の資格試験対策」や「英米の文学や文化を通して英語を学ぶ授業」「習熟度別クラス編成」の指示が高い。また、学習意欲を高めるためには「クラスメイトとの良好な関係」「教室内でのリラックスした雰囲気」「学習者に興味のある内容を扱うこと」等の必要性が指摘されている。

学生の学びの動機はさまざまではあるが、授業内容・運営上の工夫を検討する際には、これらの調査結果を各担当で共有し、シラバス作成、教材選択等に役立てていただけるようなくみづくりが不可欠となる。

< 今後の組織的取組みについて >

組織的なFD活動の取組みという観点からすれば、基礎学力調査（国語）、英語基礎力調査で得られたデータは、学生自身へのフィードバックと自律的な履修・学習計画への反映として活用することに加え、全学共通科目、各学部専門科目のカリキュラム検討、関連科目の有機運用の検討、担当教員へのデータ提供により、学生に対する日常的な自主学习指導、個別指導、履修指導にも活用していくことが必要であろう。

ただし、全学共通科目においては非常勤教員が科目担当である割合が高いため、個別学生データの提供には限界がある。専任教員間であったとしても、いかなる方法で情報を共有するのかについての更なる検討が必要であろう。いずれにしても、リメディアル系科目、キャリア系科目、英語、入門ゼミ等の担当者会議を定例化し、各調査実施後できるだけ早い段階で調査結果を提供した上で、次セメスターの学生指導、次年度のシラバス検討の材料としていただけるようにすることが次なる課題となるであろう。

2010年度基礎学力調査（国語）を振り返って

（株）ベネッセコーポレーション 大学事業部 魚原 健吾

<調査方法>

2010年度の新入生全員を対象に基礎学力調査（国語）を実施した。調査は国語（40分）と「学習実態調査（新入生アンケート）」（15分）で構成されている。国語は100点満点になっており、得点に応じて、A、B、C+、C-、D+、D-の6段階で絶対評価をつけた。文章を読むための基本的な能力が身につけている基準として、C+以上（44点以上）であることがひとつの目安となる。新入生アンケートでは、新入生の入学理由や不安に思うこと、高校での学習習慣などについて質問し、全国約20,000人の平均と照らし合わせ、全国的な傾向と比較を行った。

<調査結果報告>

■基礎学力調査（国語）

全学の平均点は52.1点で、2009年度の52.4点から横ばいとなっている。6段階の評価でいうとBに近いC+で、文章を読むための基本的な語彙および読解手法はおおむね習得できていると水準といえる。

出題分野別にみると、どの学科においても「語彙・文章表現」「論理的文章読解」「情緒的文章読解」の順に正答率が高い。「語彙・文章表現」の分野での正答率は全ての学科で60%を超えており、基礎的な力を持っている新入生と考えられる。「情緒的文章読解」が「論理的文章読解」よりも正答率が低いのは、難易度の差ではなく、出題順によるものだと考えられる。すなわち、「情緒的文章読解」は出題が最後なので、時間内に全て回答できなかった学生がある程度いたことが予想される。

・学部学科別にみえる傾向

昨年度と比較し、全学平均は横ばいだが、学部別にみると平均点の変動が比較的大きい学科もある。臨床心理、理学療法といった2009年度に平均点の高かった2学科が約4～7点低下している。

2010年度初めての実施となった4学科（日本文、仏教、歴史、歴史文化）のなかでは、日本文、歴史、歴史文化の3学科は全学の平均点よりも4～10点高い。

度数分布をみてみると、「C-」評価以下の学生の人数は、当然のことながら定員の多い学科に多い。現代社会、公共政策、社会福祉それぞれの学科平均点はほぼ全学並みだが、定員が多いだけに「C-」以下の学生数も多い。全学的に基礎学力の向上を目指す場合には、このボリュームの大きい層に

対して対策をとることが効果的だと考えられる。

・入試種別ごとの傾向

入試種別ごとに平均点をみると、もっとも低い「グループA(*)」(38.3点)ともっとも高い「センター利用」(58.3点)で20点の開きがある。このような入試種別による学力の差は全国的な傾向と一致している。

度数分布でみると、「C-」評価以下の学生の人数がもっとも多いのは、募集人数自体が多い一般入試となっている。入試種別ごとの学力の議論では、どこの大学においてもAO入試、推薦入試の学力低下が関心の中心になることが多い。しかし、度数分布を踏まえると、推薦入試・AO選抜の学生のみならずフォローを行っても、全学的な学力向上にはつながりにくいことが予想できる。

・高校時代の授業態度や学習習慣と国語得点との関連性

「学習実態調査（新入生アンケート）」の項目にある「高校時代の授業への取り組み」や「高校時代の学習習慣」と国語の得点にどれくらい関連性があるかを調べた。各質問項目に対する4択の回答を「よくした・まあした」と「あまりしなかった・まったくしなかった」を2つに分け、国語の得点分布に差が出る質問項目を探した。

授業態度で、比較的学力に差が出たのは「板書はノートにとった」、「板書以外もノートにとった」、「宿題・課題はきちんとやった」だった。一方で「予習をした」「復習をした」「計画や目標を立てて勉強した」という項目について、した学生としなかった学生の間では国語の得点に大きな差がみられなかった。自主的な行動よりもまず、言われたことをきちんとやってきた学生が、より高い得点をとる傾向が確認できた。

学習習慣については、もっとも強い関連が見られたのが「読書量」だった。すなわち、C+評価以上の学生と、C-評価以下の学生では、月2冊以上読書をしていた学生の割合に、12.6ポイントの差があった。

■学生の期待・不安

・授業への期待

全学平均では「説明の分かりやすさ」(選択率56.6%)と「専門知識の豊富さ」(同35.7%)が高い。これは全国平均とほぼ同じ値になっている。

「授業に期待すること」に対する回答を学部別にみると、学部によって、突出して高くなっている項目がいくつかある。例えば、歴史学部の「専門知識の豊富さ」(全学35.7%に対し、歴史学部55.7%)や、保健医療学部の「板書のわかりやすさ」

(全学 11.1%に対し、保健医療学部 20.0%)が高い。学部によって異なる入学生のニーズをきちんと把握して対応する必要がある。

入試種別ごとにみると「AO 選抜」では「説明のわかりやすさ」「先生とコミュニケーションがとれる」「質問に対する丁寧な対応」が全学より高く、丁寧で親切的な対応を学生が求めている様子がわかる。

「グループ A」では、「課題・レポートの量の適切さ」が比較的高い。クラブ・サークル活動に力を入れたい割合が高い入試種別のため、授業との両立を気にかけている学生が多いと考えられる。

・大学生生活への不安

「大学生活への不安」に対する肯定回答率(あてはまる・ややあてはまると回答した学生の割合)を、入試種別ごとに確認する。すると、「センター利用」では「他の学部・学科に編入、または他の大学を受験し直したい」が 37.6%と高く、不本意入学が多いことが予想される。

また、「学びたいことがみつかるかどうか不安」がグループ A、グループ B では 50%以上と高くなっており、佛教大学あるいは自分の学部でどのようなことが学べるのかを実感できる機会が必要と考えられる。

・大学で何をやりたいのか

大学に何のために進学したのか、という問いに対し、多くの学科でもっとも多かったのは「将来のための資格や免許をとりたいたい」だった。全国平均では「興味や関心のあることを勉強したい」が一番多い項目であることと比較しても、佛教大学の学生は実学志向が強いといえる。

資格や免許といった明確な目標が入学時点で定まっていることは、素晴らしいことだが、その資格・免許がどんなものなのか、取得するのがどれくらい大変なのかを理解しているのか、については注意したい。「保護者に薦められてなんとなく」という弱い動機だけだと、勉強が忙しくなったときにすぐに諦めてしまう危険性が高くなる。内容自体が自分の想像と違っていたというミスマッチにつながりかねない。

・なぜ佛教大学を選んだのか

全国平均と比較して選択肢「学びたい学問分野がある」の選択率が 70.3% (全国平均 58.1%)、「資格や免許の取得」の選択率が 61.3% (全国平均 25.1%) と高く、学問への意欲が高いことがうかがえる。しかし、入試種別ごとにみると、グループ A では「学びたい学問分野がある」の選択率は 50.5%と比較的低い。グループ A はスポーツ強化枠や課外活動といった入試形態から「クラブ・サークル活動が盛ん」が高い。授業以外にやりたいことがあることは大切なことだが、だんだんと授業から足が遠のくことにならないよう、注意が必要な層といえる。

■今後に向けて

全国的に新入生の学力は低下傾向にあるが、佛教大学では学力の高い層も一定数おり、ひとまとめの基礎学力支援策が打ち出しにくくなっている。どの学力層の学生をどの程度のレベルに引き上げるのか、という学生のグループ分けと目標設定が必要と考えられる。また、大学での学びにつなげるために、基礎学力を補強するだけでなく、学生が大学や授業に求めていることを把握してカリキュラムに反映させていくことが重要ではないか。

(*)・・・入試種別は一般入試、センター利用、AO 選抜、公募推薦、グループ A、グループ B の 6 つに分類した。グループ A とは、特別推薦入試(法人系列校・課外活動・スポーツ強化枠)、宗門後継者、帰国生徒をまとめたものである。また、グループ B は、特別推薦入試(指定校・教育連携校・同窓)をまとめたものである。

2010 年度英語基礎力調査を振り返って

英米学科 准教授 持留 浩二

1. 英語基礎力調査について

佛教大学では 2004 年度より、全新 1 回生を対象にして、入学時と 1 回生終了時に TOEIC Bridge IP テストを使用した英語基礎力調査を実施している。この調査は本学における英語教育プログラムをより効果的なものへと改善させていく上で大きな役割を果たしている。

2. TOEIC Bridge IP テストについて

TOEIC Bridge とは TOEIC の特長を備えつつ初・中級レベルの英語能力測定に照準を合わせて設計されたテストで、テスト時間と問題数は TOEIC テストの半分に設計されている。問題はリスニングセクション (25 分間・50 問) と、リーディングセクション (35 分間・50 問) からなっており、スコアはリスニング 10 点～90 点、リーディング 10 点～90 点、トータル 20 点～180 点の 2 点刻みで表示される。

3. 入学時のスコア

入学時のトータルスコアについては、調査が開始された 2004 年度以降では 2007 年度が最も好成績であった (124.8 点)。しかしその次の年 2008 年度はわずかながら下落した (124.0)。それでも過去の成績と比べて高水準を保っていたのであるが、2009 年度は大きくスコアは下落し、過去 6 年間の調査中 2 番目に悪い成績となった (121.8)。残念ながら今回の調査でもこの下落傾向に歯止めはかからず、2010 年度全体の平均スコアは 3 年連続下落という結果となってしまった (120.5)。

学科別にみると理学療法学科が全学科中一番高い成績を上げている (133.3)。ただこの成績も前年度と比べると 3 点低下しており、ここ数年のスコア悪化の傾向に歯止めはかかっていない。続いて教育学科、英米学科、臨床心理学科という順になるが、この 3 学科の順位は前年度と同じである。ここからは今年度より新学科が入ってくるので前年度との比較がしにくくなる。簡単にまとめると、前年度の順位は、作業療法学科→社会福祉学科→現代社会学科→人文学科→公共政策学科→中国学科となっていたのに対し、2010 年度は、作業療法学科→日本文学科→歴史学科→社会福祉学科→歴史文化学科→現代社会学科→公共政策学科→中国学科→仏教学科という順位になっている。

4. 1 回生終了時のスコア

前年度、1 回生終了時のスコアは 2004 年の英語基礎力調

査開始以来最高のスコアを記録し (129.2)、1 年間の学修を経たスコアの伸びも調査開始以来最高を記録したのだが (+7.4)、2010 年度は過去 3 番目に悪いスコアとなってしまった (126.1)。前年度より平均点でマイナス 3 点となっている。ただ入学時のスコアが低かったため、スコアの伸び自体はそれほど悪いわけではない (+5.5)。とはいえ前年度の素晴らしい結果からは一歩後退の感が否めない。

学科別順位の変化も学部学科改組のため分かりにくくなっているので、簡単に前年度と 2010 年度の順位を紹介するにとどめておきたい。前年度は、英米学科→教育学科→理学療法学科→臨床心理学科→社会福祉学科→作業療法学科→人文学科→現代社会学科→公共政策学科となっていたのだが、2010 年度は、英米学科→理学療法学科→臨床心理学科→教育学科→歴史学科→日本文学科→作業療法学科→歴史文化学科→社会福祉学科→現代社会学科→公共政策学科→仏教学科となっている (中国学科は受験者 5 名とデータが少なすぎるので除外)

5. スコアの伸び

前年度は +7.4 という過去最高の伸びを記録し、調査が開始された 2004 年度以降で最も生産的な 1 年となったのであるが、2010 年度はスコアの伸びが +5.5 と、決して悪い数字ではないものの前年度の素晴らしい伸びには届かなかった。

学科別に伸びを見てみると、1 番の伸びを示したのは前年度と同じ英米学科となっており +11.4 の伸びを示している。前年度はその次に人文学科が大きな伸びを示していたのであるが、今年度は前年度まで人文学科に含まれていた歴史文化学科が +9.5 という大きな伸びを記録している。続いて臨床心理学科の +7.5、さらに現代社会学科と歴史学科が同じ +6.9 の伸びを示している。そこまでが全体平均の伸び +5.5 よりも高い数値を記録した学科となっている。平均よりはやや落ちるものの +5.1 とそれほど悪くない伸びを示したのは日本文学科と現代社会学科、続いて +4.1 の作業療法学科、+3.1 の理学療法学科、さらに +2.0 の教育学科となっている。作業療法学科と理学療法学科と教育学科は入学時スコアが平均より上、特に理学療法学科と教育学科については 1 位と 2 位という高い学力を持っていただけに 1 年間の学修を経ての伸び悩みは大いに気になるところである。

気になると言えば、その教育学科よりも成果が上がらなかったのが公共政策学科と仏教学科だ。公共政策学科の伸びは -0.6 とわずかながらのマイナスの伸び (つまり 1 年間の学修を経て学力が低下している) にとどまったのに対し、仏教学科のマイナスの幅は -3.3 で際立っている。

6. TOEIC Bridge 150 点以上

本学の英語プログラムの教学目標は、2年間の学修で TOEIC 500 点に到達することである。TOEIC Bridge の 150 点が TOEIC 470 点に相当するのであるが、2010 年度の 150 点以上取得者数について言うと、入学時では人数においても割合においても 2004 年度に調査を開始して以来 3 番目に悪い数字となっている。さらに 1 年の学修後のスコアの方は、人数こそ 104 人ということで一見悪くない印象を与えるかもしれないが、全体からの比率で言うと、7.8% となっており、この比率は実は過去最低の比率である。つまり 2010 年度は全体的にも伸び悩んだが、得点の上位層はさらに伸び悩んだと言えそうだ。

7. サブスコア

TOEIC Bridge は受験者の英語能力向上に役立てるため 5 分野 3 段階の診断情報をサブスコアとしてフィードバックしている。

毎年の傾向として語彙と文法において学力の伸び悩みが見られる。今回は少し変わっていて、文法については例年通りの伸び悩みが見られるのであるが、語彙は順調な伸びを示している。その代わりに例年に比べ Functions（言葉のはたらき）に伸び悩みが見られる結果となっている。

8. 英語基礎力調査アンケート

1 年に 2 回、1 回生を対象に英語基礎力調査を行なう際、同時に英語学習に関するアンケートが行われている。

英語の教員には二つの果たすべき目的があると私は考えている。学生の英語力を向上させることと学生の英語学習へのモチベーションを上げることである。英語基礎力調査の結果からは、学生の英語力の変化は見る事が出来るが、モチベーションの変化は見ることは出来ない。そこで前年度に以前の英語基礎力調査アンケートを一新し、彼らの英語学習への意欲や、どういった英語教育への取り組みが学生の意欲をアップさせる上で必要なのか、あるいはどういった授業運営及び内容が必要なのか、そして彼らが授業以外で英語学習にどれだけの時間を割いているのか、そういった事柄をさぐるアンケート内容にした。

まずは英語学習へのモチベーションについてであるが、日本文学科と英米学科では明らかなモチベーションのアップが見られるが、その他の学科では総じてダウンしていた。ほとんど全ての学科でのモチベーションの下落という例年の傾向は 2010 年度も続いてしまったわけで、1 年間の学修を経ていかに受講生に英語学習へのやる気を起こさせるかというのが今後の佛教大学における英語教育の大きな課題であると言える。

英語学習へのやる気を起こさせる上で重要だと思う取り組みについては、学科ごとに随分違いが見られた。英米学科は「TOEIC や英検等の資格試験対策」に対するニーズが際

立っているし、歴史文化学科は「英米の文学や文化を通して英語を学ぶ授業」へのニーズが際立っている。このあたりの学科ごとのニーズに添えていくことはそれぞれの学科の受講生のモチベーションを上げる上で重要になってくるだろう。全体的に見てみると、ここ 2 年間の就職難が影響したのか、「TOEIC や英検等の資格試験対策」の数値がやや高かった。

英語の授業を受ける際、英語学習へのやる気を起こさせる上で重要だと思うものについては、「クラスメイトとの良好な関係」、「教室内の自由でリラックスした雰囲気」、「学習者に興味のある内容を扱うこと」、「教師と学習者の良好な関係」あたりの数値が高くなっている。

自分に最も必要だと思う英語のスキルについては、予想通りリスニングやスピーキングのスキルを必要と感じているようだ。1 年間を経てその数値が上がっていることから、その苦手意識が増え続けていることが分かる。

英語を学習する理由については、多かった答えは「教養として英語は大切だから」、「将来の就職や留学のため」、「外国へ旅行したいから」、「なんとなく必要性を感じるから」となっている。将来の就職や留学や外国旅行は良いとしても、「教養としての大切」や「なんとなく必要性を感じている」という答えは、学習への動機づけの欠如を表しているように見える。もう少し明確な学習への動機づけを持たせるためにも、教師はなぜ英語学習が必要なのかを学生に向けてアピールする必要があるのではないだろうか。

授業時間以外で週に何時間くらい英語の勉強をしているかについては、2010 年度は前年度に比べて「全くしていない」の率が低下している。1 年間の学修を経ての変化を見てみると、全体的に「全くしていない」の割合が大きく減って、「30 分未満」から「1 時間～1 時間 30 分」あたりが増えている。これは良い傾向である。

まとめと今後の課題

まずこの調査を続けることの意味であるが、この調査により学生の英語力の現状を客観的に把握できる。しかも過去のデータを見ると、各学科の英語力はそれぞれの学科の入学難易度と比例する傾向にあり、この調査結果はそれぞれの学科の一般的な学力を知る手掛かりにもなる。その他にもこの調査結果は、1 回生と 2 回生の共通科目英語の習熟度別クラスのクラス分けのテストとしての役割も果たしている。

しかし同時に、この調査結果をどのように今後の英語教育に生かしていくかという課題が残されている。今のところなかなか有効な方法が見えてこないのであるが、まずはこの調査結果を広く教員間で共有する必要があることは間違いない。2010 年度は、教員研修会にて広く佛教大学の教職員に調査結果を伝えることができた。非常勤講師の方々にも同じ情報を共有してもらおう必要があると思うので、毎年の英語教務連絡会では、この情報を提供している。

今後も続けて教授法開発室の室員と共にさらなる活用の方を模索していきたい。